

〔館員随想〕

海外調査報告
チェスタービーティーライブラリーと
大英博物館の特別観覧

大阪府立大学と大和文華館合同の海外調査の一行は、1月24日の午前11時発の飛行機で関西国際空港からダブリンへ出発しました。アイルランドはグリニッジ標準時です。途中、フランクフルトでの乗継ぎの待ち時間が長く、翌日の午前0時を過ぎた頃にダブリン国際空港に着き、タクシーで市街地にある宿泊先のホテルへ直行しました。調査はその日の10時から始まります。この海外調査では、できるだけ負担を少なくするため、美術館の近辺に宿泊することになりました。ダブリンのホテルもチェスタービーティーライブラリーの所在するダブリン城のごく近くです。この地区には、『ガリバー旅行記』の著者として知られるジョナサン・スウィフトが司祭長を務めた聖パトリック寺院、文学者のサミュエル・ペckettの出身大学、トリニティー・カレッジなど、歴史的な建築物が集まっています。ホテルの道路を挟んだ斜め向かいには、ダブリンで最も古い教会、クライスト・チャーチでした。

ホテルで疲れをとり、ロビーで待ち合わせ、石畳の道を5分ほど歩くとチェスタービーティーライブラリーに着きました。月曜日には展示場は閉まっていますが、作品は観覧できます。約束の時間に少し早かったので、入口の前で待っていると、保安員の方がドアを開けてくれました。受付で要件を伝え、担当者に連絡を取り、しばらく待つよう指示がありました。入口には来館者を歓迎するように、本を手で微笑むチェスタービーティー卿の胸像が据えられています。建物は展示棟と収蔵庫棟の間を塞ぎ、アーケードで天井を覆ったように見えました。一階には、食堂と図録やミュージアムグッズを販売する部屋があり、入口から真直ぐ進むと階段があります。階段は二階で左右に分かれ、左側は宗教美術の展示場、その三階が装飾美術の展示場になっています。私たちは準備が整った合図を受け、二階の右側にある観覧室に

向かいました。

チェスタービーティーライブラリーでは、図書の観覧は少なくとも一ヶ月前に予約が必要です。願書はホームページからダウンロードできます。窓口になっている観覧担当者に連絡すると、作品の管理担当者に連絡するように返信があります。管理担当者の了解を得た後、再び希望する作品と日時を観覧担当者に確認します。こうして、スケジュールと作品の状態に問題が無ければ、観覧が許可されます。今回の観覧担当者はセリン・ワード氏、東アジア部門の担当者はローラ・マルダウニ氏でした。観覧室は施錠され、インターフォンで要件を告げると、観覧担当者のワード氏が出迎えてくれました。観覧担当者は観覧室の管理責任者でもあります。部屋は思ったより広く、三組の向かい合わせにした長いテーブルを一行に繋いでいました。テーブルごとに観覧者が座るとすれば、6組まで観覧が可能です。ワード氏の席は観覧室を一望できる入口に近い位置にあり、もう一人の補助員と思われる若い男性の席は観覧室の最も後方にあります。二人の席から観覧者の様子が確認でき、必要に応じて対応できます。その日の観覧者は私たちだけでした。最初に、ワード氏から、午前中の終了時刻と午後の開始時刻、終了時刻の確認があり、作品を扱う前に手を清潔にすること、観覧に必要な物以外は席に持っていないことなど、観覧に関する規則や注意事項の説明を受けました。観覧室の奥にもドアがあり、次の部屋に通じる通路に沿って洗面所が設置されています。このドアも必要な時以外は施錠されています。その他、机の上に敷く毛氈、作品を抑えるガラスの卦算、無理なく冊子を開くためのスポンジの台、白手袋が準備されていました。ただし、白手袋は手が清潔であれば、使用しなくてもよいとのことでした。今回は巻子本と冊子本ですが、作品の分野に応じて必要な備品が用意されてい

るのでしょう。観覧者への配慮だけではなく、作品の安全上においても重要なことです。私たちは三班に分かれ、班ごとに観覧を希望する作品のリストを上げていました。一日目に観覧する作品はワード氏がリストから選んでいました。観覧者の目的や作品を扱う能力によって、所要時間は異なりますので、観覧者自身しか妥当な作品数はわかりません。観覧者の希望を尊重し、観覧室の使用時間によって管理していることとなります。観覧の最初に説明を与えることは、観覧者により意味での緊張感をもたらします。私は宮崎学芸員と同じ班でした。共同で調査をする場合、事前にお互いの調査目的を確認し、作品の取り扱い、採寸、メモの筆記など、役割を分担しておく必要があります。例えば、作品を取める箱は汚れている場合が多いので、箱と作品を扱う担当は分けた方がよいでしょう。また、話す機会が多くなるためにマスクは必要です。

私たちはチェスタービーティーライブラリーでの二日間の調査を無事に終え、27日の早朝にホテルを立ち、ダブリン国際空港からロンドンのヒースロー空港へ向かいました。ヒースロー空港から大英博物館の所在するラッセル・スクウェアまで地下鉄が通っています。やはり、宿泊先のホテルは大英博物館から歩いて数分です。大英博物館のジャンギヤラリーで、アジア部日本セッション長のタイム・クラーク氏と午後1時30分に待ち合わせていましたので、ホテルに荷物を置き、直ぐに大英博物館へ向かいました。クラーク氏は浅野館長と同じ浮世絵の研究者であり、日頃から親しく交流しています。私もクラーク氏が日本に留学していた頃に面識がありますが、ほぼ20年ぶりの再会になります。大英博物館では特に観覧担当者を設けず、特別観覧の許可は作品担当者の判断に任されているようです。クラーク氏は挨拶を済ますと、部屋へ案内してくれました。部屋の壁には木の板を貼り、作業台として中央に四つのテーブルを合わせて置きました。作品の調査室ですから、それほど広くありません。クラーク氏

は私たちの希望する順番に作品を二、三点づつ出し、私たちが調査を終える度に作品を隣室に移動して、次の作品を選んでくれました。観覧した作品は最後に記載します。クラーク氏の席は部屋の隅にあり、私たちが調査に集中できるように、静かに机の上のパソコンに向かっていました。次の日は、女性の学芸員、ロッシーナ・バックランド氏に立ち会っていただきました。バックランド氏は幕末から明治にかけての文人画を研究しています。最終日の29日に再びクラーク氏に担当していただき、大英博物館での調査も予定通りに終えることができました。この間に、クラーク氏と夕食をとりました。クラーク氏は最近の関心事や計画中の浮世絵の展覧会について熱心に話していました。大英博物館では館内連絡がほとんどメールになり、千人もの職員がいる博物館ですから、外部のメールと合わせれば、百通を超える日もあるそうです。数多くのメールから重要なメールを見落とせば、大きな問題になると話していました。こうした会話の中で、ある作品が話題に上り、クラーク氏は私たちの調査に時間の余裕があれば、その作品を見せてくれることになりました。翌日の最終日、私が作品について意見を述べると、クラーク氏からあなたの意見をインターネット上に公開していいかと尋ねられました。もちろん、了承しましたが、今更ながらインターネットの影響の大きさを感じました。今回のチェスタービーティーライブラリー、大英博物館という伝統ある図書館、博物館での海外調査は、日頃、研究者の作品調査を受け入れる立場の私たちにとってたいへん参考になりました。作品を所蔵する美術館の社会的な役割をあらためて考え直すことができました。（中部義隆）



季刊 美のたより No.170

平成22年5月6日

発行 大和文華館